

富山大医学部公衆衛生学講座の稲寺秀邦名誉教授らの研究グループは22日、妊娠判明時に母親がネガティブな感情を抱いたり、無関心であったりすると、子どもの発達の遅れが多くなる」と発表した。周囲の支援によって、感情との関連が緩和されることも分かった。

7万3千組を対象に調べた。妊娠判明時の気持ちを「とてもうれしかった」「予想外だったがうれしかった」「困った」「特に何とも思わなかった」「その他」に分類。「とてもうれしかった」

富山大など調査

「た」と回答した場合に比べ、その他の回答では3歳時点で発達の遅れが疑われる場合が多いことが判明した。周囲の精神的な支えや人とのつながりが関連を和らげることも明らかになり、研究グループは「妊婦健診の受診を促進し、育児期までの継続的な支援体制の構築が必要」とした。研究成果は6月、国際学術誌に掲載された。